

Title	真理という女 : 後期ニーチェ思想における真理像
Author(s)	生島, 弘子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2009, 43, p. 33-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10613
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

真理という女

——後期ニーチェ思想における真理像——

生 島 弘 子

0 「真理が女だとすると…」

ニーチェの記述において、女達は極めて印象的に描かれる。女として描かれるもの、例えば真理や生は、何故その様に描かれるのだろうか。「真理が女であると仮定されるなら、どうだろうか？ 全ての哲学者達は、彼等が独断論者であった限りにおいて、女達に精通していなかったのだという疑念は、根拠のあるものではないか？」(JGB Vorrede, KSA.5, S.11)¹⁾

『善悪の彼岸：未来の或る哲学の為の序曲』はこの一文で始まる。従来の哲学の独断論的先入見とニーチェが批判するものは、真理をどの様なものとして追究する事なのか、そしてそれと対比される女の様な真理とはどの様なものなのか。本稿では、後期ニーチェ思想における真理概念の全体を扱う事も女の表象全てを扱う事も出来ないが、真理との類比における女のイメージ、女として描かれる真理のイメージを概観し、このイメージの意味を探る事を目的としたい。

1 神である真理

未来の哲学を待望し、ニーチェは従来の哲学を批判する。真理に対する時の独断論者達の不味さとは何を意味するのだろうか。この従来の哲学は誠実性即ち真理への意志 (der Wille zur Wahrheit) に突き動かされて来たものであるとされる。

1.1 真理への訓育

見方によって、誰が見るかによって変わったりしない、不変で不動のもの、常に妥当するものとしての真理があると思う事、それを追求する事が真理への意志と呼ばれるものである。真理への意志を極めて道徳的なものとニーチェは言う。不変で不動である様な真理を何と引換えにしても求めるよう、人間は道徳の下で訓育された。道徳は、人間が或る環境の下で、諸々の外的条件との関係において、生きられる為の振舞い方を訓育するもの、訓育の為に服従させるものであると考えられている。この真理への意志はヨーロッパを支配して来た道徳であり、キリスト教道徳の神髄であるとされる。そして真理への意志としての学問、近代科学はキリスト教的信仰と何等敵対するものではなく、同じものであるとされる。「学問と禁欲主義的理想 (das asketische Ideal)、それ等はどちらも一つの基盤の上に立っている、私はこれを既に理解させたが、詰まり真理の同じ過大評価の上に立っているのだ (もっと正しく言えば、真理の評価と批判の不可能性の信仰の上にだ)、正にそれ故にそれ等は互いに必然的に同盟者である、その結果それ等は、もしそれ等と戦うなら常にただ一緒に戦われ問われる事が出来るものなのだ。」(GM III. 25, KSA.5, S.402) 此処で禁欲主義的理想と言われているのは、何かの為にではなくそれ自体として価値のあるものの事であり、そういうものが存在すると思う事が禁欲主義的理想を信じているという事である。これと同様に近代科学は認識を、即ち真理が認識される事を、それ自体として価値のあるものとしている。この信仰、この疑う事の出来なさは、真理を神的なものに見なす事であり、真理である神を、神である真理を信仰する事であるとされる。

このような真理への意志には「確実性の必要 (das Verlangen nach Gewissheit)」(FW 347, KSA.3, S.581) がある。ニーチェは、真理とは確信の感情であり、その様な確信、何かを真理と見なす判断は生が必要とするもの

だとする。神である真理を求めるのはどの様な生、どの様な者であろうか。依って立つ為の何か確固たるものを求めるのは、揺らぎ易い者の、不確実性の中では自らを保つ事が出来ずそれを恐れる者の、弱さの本能 (der Instinkt der Schwäche) からであるとされる。確実性の必要はその欠如の表れである。確実性とは確信されている事柄に属する性質といったものではない。それは感情であり、それも強い自己感情、自己自身についての「根本確信」(JGB 287, KSA.5, S.233)、強さの感情である。対して確実性の必要とは弱さの感情である。自己自身から生じる強さを持たない者は余所から強さを得ようとするかの様に、自分以外の何か別の権威に命令され、それに服従する事を必要とし、欲する。この欲求の激しさは信仰する者の生の強さを意味しない。彼等は確実なものを信仰する、それは神である真理への信仰である。だがその確実なものは何処にあるものだろうか。「学問への信仰が前提としている様な大胆で極限的な意味での誠実な者が、それ故に生や自然や歴史の世界とは別の世界を肯定しているという事は、疑い無い。そして彼がこの別の世界を肯定する限りにおいて、どうだろう、彼は正にそれ故にその世界の対立物、即ちこの世界、我々の世界を否定せねばならないのではないか？」(FW 344, KSA.3, S.577) ニーチェが描く自然とは不確実で豊穡で算定出来ない、諸力の変動であり、時に恐るべきものである、そして生とは自らの権力を、力としての自らを放出しようとするものである。自然と生とは殆ど同じものと考えられて良い。別の世界を信仰する者にとって、この世界、自然、彼等も生きている筈の生は別の真なる世界との隔てである。別の世界の信仰はこの世界の否定であり、その世界とこの世界の対立の信仰である。

「諸価値の対立についての信仰」(JGB 2, KSA.5, S.16) は従来の哲学の独断論的先入見であるとされる。これは先程禁欲主義的理想と言われたものとはほぼ等しい。其処では或るものがそれと対立するものや反対のもの

から生じる事は有り得ず、真理が誤謬から、或いは真理への意志が欺瞞への意志から、或いは意識が本能から生じるという様な事は有り得ないと考えられている。この信仰は二重である。背反する二つのものの存在についての、決してどちらかに還元され得ない二項の対立についての信仰と、その価値序列についての信仰とである。そしてこの真理対虚偽の対立は、別の真なる世界とこの不確実性の世界との対立に対応している。

1.2 欺き

真理を意志する者、別の真なる世界を信仰する者にとって、この世界は誤謬の世界である。彼等にとって真理から隔てられている事はこの世界の不確実性によって欺瞞の内にある事と同じである。これは彼等が欺かれているという意味だろうか。現に欺かれているから、欺かれていない状態を望むという事なのだろうか。しかし彼等が誤謬よりも真理を求めるのは、真理がより有益だからという理由からではないとニーチェは言う。真理への意志、誠実性は欺くまいとする意志として考えられる。「この無条件の真理への意志、これは一体何だ？ 欺かれない事を意志しているのか？ 欺かない事を意志しているのか？ 詰まり、「私は欺きたくない」という普遍化の下に「私は自らを欺きたくない」という一つのケースをも含めるなら、後者の様に真理への意志は解釈されるだろう。(略) 欺かれない事が意志されるのは、欺かれる事が損失であり、危険であり、取り返しがつかない事になるという仮定の下でだ。この意味でなら学問は長期的な惻怍さや注意深さや有用性であるだろう、だがこれ等に対しては当然、欺かれないとする事は実際それ程損失でも危険でも致命的でもないのではないのかという事を反論として挙げる事が許されるだろう。」(FW 344, KSA.3, S.575) 欺かれないとするのは功利的な理由からなされる事であり、しかし真理への意志やそれによって形成される学問は功利的な理由から意志さ

れているのでない、それ故、真理を意志する者は欺かれまいとしているのではなく、欺くまいとしているというのである。欺くまいとする事は嘘を吐くまいとする事、隠すまいとする事であり、誰に対しても、殊に確実性を与えてくれる神に対して、自分の全てを示し、神に見尽くされる事である。嘘を吐くまいとする事は、仮象のこの世界を否定する事である。真理認識の意味は何等かの概念や意識内容の所有といった事ではなく、真理を意志する者の許では自己否定の情動、自己否定へ至る衝動である。

真理への意志が自己否定に至るとはどのような事か、それは生の否定であるが故に自己否定であるというのみならず、その最終的帰結の故にそう呼び得る。「二千年に渡る真理への訓育、それは最終的には神への信仰における虚偽を自らに禁じる」(FW 357, KSA.3, S.600, GM III. 27, KSA.5, S.409) と言われる。ニーチェは誠実性はその訓育の結果としてそれ自らについても疑い、問うようになると考える。真理を問う事はその最後の発展段階に至って、自らを崩壊させる問いを自らが養って来た人間に立てさせるとされる。誠実な者の許で真理への意志とは、或るものの彼にとっての意味ではなく、彼とは独立的なそのもの自体の意味を求めるものである。そしてこの様な意味の問いが彼の思惟、認識の全てである。価値が価値付ける者の生と価値付けられるものの関係において生じるのでないならば、価値がその者の生に即して判断されるのでないならば、それ自体としての価値を求める彼の問いは無という結論をしか得られない。此処へ至る事、真理への意志によって生きられた者が真理への意志自体の価値を問わねばならなくなる事、真理への意志が問題的なものとなる事を、ニーチェは「ヨーロッパの次の二百年に残しておかれた百幕に渡る大芝居、あらゆる芝居の中で最も恐ろしく疑わしく、そして恐らく最も希望に満ちてもいる大芝居」(GM III. 27, KSA.5, SS.410) と呼ぶ。この危険な大芝居がその内に潜ませている希望とは、真理の別の求め方、真理と認識者との新たな

関係であり、パウボという女神の名で表現される真理との関係である。

2 バウボ

真理に対する別の関係とはどのようなものだろうか。パウボという名の真理については以下の様に語られる。「そのヴェール (die Schleier) が引き剥がされても真理がなお真理であり続けるという事を、我々は最早信じない (略)。今日我々にとっては、全てを剥き出し (nackt) の状態で見ようとしないこと、全てのものの許に居合わせようとしない事、全てのものを理解し「知ろうと」しない事は、礼儀 (die Schicklichkeit) に適った事と見なされる。「神様があらゆる所に居合わせるって本当？」と小さな少女が母親に尋ねた。「でもそれは無作法な (unanständig) 事だと思わ」——哲学者にとっては良いヒントだ！ 自然が謎と色とりどりの不確実性の背後に身を隠した時の羞恥 (die Scham) は、もっと尊重した方が良い。恐らく真理とは、その奥底を窺わせない根拠を持つ女ではないか？ 恐らくその名は、ギリシア語で言うと、パウボ (Baubo) というのではないか？

(略) ギリシア人達は上手く生きる事が出来た。生きる為には、表面に、襜に、皮膚に、勇敢にも留まる必要があり、仮象を崇拜する必要があり、形や音や言葉、仮象のオリュンポス全体を信じる必要がある。」(FW Vorrede 4, KSA.3, S.353)

従来之神である真理への意志に対立するものとして、或いは単なる対立ではなくその構造を模倣しながら新たに意味付け直すものとして、パウボというイメージによってニーチェは真理を求める事を、どの様に描こうとしているのだろうか。パウボとは娘ペルセフォネを失って嘆く豊穡の女神デメテルの前で衣服を捲り上げ、彼女を笑わせ豊穡性を取り戻させた女神である。 確実性の必要よりも、不確実性の危険な喜び、疑いを起こさせる女への愛の様な真理への愛があると言われる。

2.1 ヴェールの誘惑

上の引用では真理のヴェールとパウボの衣服が類比されている。ヴェールに覆われた真理というイメージは、ヴェールに覆われていないありのままの真理があり、それこそが見られるべきものであるという考え方から生じている。この様な真理のイメージを持つのは、あの独断論的先入見、真理への意志を持つ者である。価値あるものを見えなくさせているヴェールは見る者にそれを剥ぎ取ろうとさせる。隠蔽するヴェールは否定的な価値しか持たず、ヴェールを剥ぎ取る事の出来なさ、真理に到達する事の出来なさは、道徳的な真理を意志する者にとって彼の理性の無能力と捉えられる。だがそうではなく、引寄せているのはヴェールの背後のものではなく、ヴェールの方だとニーチェは考える。ヴェールはそれが覆うものの全てを見させず、それによってその背後のものを欲求させるものであり、無くもがなものとしてある事によって背後のもの価値を齎すものである。人がヴェールの前に居る時にこそ、人はヴェール越しに見えるものを真理として求める。此处で、真理を求める事は真理の価値の疑い得なさ、真理の価値自体への服従から、ヴェールに誘惑される事として意味付け直される。

ヴェールを纏う事は装う事と言って良いだろうが、それは女の技だとニーチェは言う。女が装うのは羞恥からである。しかし女の羞恥は剥き出しで見られる事に耐えられない弱さではない。この耐えられなさ、これは裸体の醜悪さであり身体の弱さなのだが、それは「ヨーロッパの男達」(FW 352, KSA.3, S.588)のものであるとされる。この男達とは違って、「女には羞恥する根拠が余りにも多い。(略)化粧する事 (das Sich-Putzen) は永遠に女性的なものに属する事ではないか。女は真理を意欲しない。女の偉大な技術は嘘を吐く事 (die Lüge) であり、最高の関心事は見掛け (der Schein) と美しさである。」(JGB 232, KSA.5, S.171) 装いや化粧の意味は、それを見せる事で見た者に、見せた当のものとは別のものを意

欲させるという所にある。男に見せる事によって、化粧自体或いは化粧された顔ではなく女を男に求めさせる化粧の働きは、背後のものを求めさせるヴェールの働きと同じである。そして女にとって化粧は素顔という、より価値のあるありのままの真理の隠蔽ではなく、また、醜悪さの様なより価値の低いものの隠蔽という事でもない。化粧をするのは女として見られようとする時、それを見せ、見た男を引寄せようとする時にである。化粧の機能はその様な価値、女であるという意味を齎す事であって、この価値は素顔の否定から生じているのではない。素顔と化粧とは真理と虚偽の様な対立にはない。女が真理を意欲しないとは、女の許ではあの価値の対立についての信仰は無いという事であり、化粧という女の嘘は真理に対立する欺きではないという事である。「全てのまともな女性達(die rechte Frau)にとって学問は羞恥に反する。その際彼女達は皮膚の下を、更に悪い事には、衣服と化粧の下を覗こうとされた様な思いをするのだ。」(JGB 127, KSA.5, S.95) 此処で言われている学問とは、全てを見尽くそうとする、真理自体を意志するものに他ならない。衣服と化粧によって女は求められるものとしてあるのに、それ等が剥ぎ取られるなら、女は求められるものとしてある事は出来なくなる。羞恥は暴かれるべきではないものが暴かれた時に、見る事において、また見られる事において生じるが、装う事を知らない者達や、弱さ故に隠す事を知らない者達の間には羞恥は有り得ない。女の羞恥は身体に、それも性別化された身体に関わっている。その身体とは見掛けであり表面である。日常的にも、女であるか男であるか決定される、どちらかの性別を割り当てられるのは、身体の形、それも表面的な形によってである。

コフマンは女の憤みについて述べ、「真理は恐れを呼び起こす事無しにヴェールを剥がされてある事は出来ない」(Kofman, p.251)²⁾と言う。羞恥を侵す者には女は災いを齎す恐るべきものともなる。ではその様な女に

対してはどの様に振舞うべきなのか。

2.2 礼儀と喜び

羞恥とは表面に関わるものである。表面に留まる者は、真理自体への到達出来なさを真理の羞恥として、ヴェールを引き剥がさない事を真理に対する礼儀として意味付ける。では礼儀とはどういう事だろうか、何故それは重要なのだろうか。

真理が女であるという表現は、真理と認識者との関係を人と人との関係の様に、物と人との関係とは異なるものとして、描いている。それは人を知る事と物事を知る事とは違うという事である。此処での人を知る事とは、単に或る人の顔や名前や経歴や諸々の個人情報といった事を知っているという事ではなく、その人と良い関係を結べる、上手く付合えるという事を意味している。それは様々な状況に応じてその都度その人にどう接すれば良いかが解っていてそれを実行出来るという事であるが、この振舞い方はそれぞれがどの様な人間であるかという事と互いがどういう関係にあるかという事に懸かっている。そしてこれは、無関係の他人から教えてもらえるものではなく、自らの体験によって習得するしかないものである。誰かに対して或る人が、別の人がその誰かに対して上手く行った事と同じ事をしても、それでその人も成功するとは限らない、寧ろ高確率で失敗する。それはその人と別の人とは違う人間で、その誰かとの関係もそれぞれ違うからである。関係性に適切な振舞い方がある、それが礼儀という事である。真理認識がその様な関係形成に類比されるという事は、それが何等かの概念内容や意識内容の伝達や所有ではなく、或る振舞いだという事である。

羞恥を侵害しない様に真理を求める事、その様に真理に対して振舞う事が生きる術であり、それは詰まり生と付合う術、生を愛する事であると言える。生もまた女と呼ばれるものである³⁾。求めれば遠離り求めなければ

擦り寄って来て気を引こうとする女の様なものと上手く付合う事、それを愛する事とは、そのものの全てを知り見尽くす事ではなく、所有や確保といった事でもなく、そのものが遠離る事に絶望せず求め得る事だという事になる。求められているものの捉えられなさや疑わしきは、確実性を必要とする者には堪え難い苦痛や一層の欠乏や恐怖を感じさせるものだろうが、強さの故に求める事が出来る者にとっては新たな幸福、喜びとされる。男が羞恥を慮って暴かずにいる時にこそ女は装い男を誘惑し、男は女を求めそれを喜ぶ。これと同様に、ヴェールは見る者を誘惑し、見る者は真理を欲求する。真理はヴェール越しに見えるもの、ヴェールの背後のものというのではなく、ヴェールの上に、ヴェール越しに見えるもの、その表面に現れる像である。真理とはヴェールを取り去っても残る背後のものではないが、ヴェールの前に留まる時にこそ背後のものとして見えるものである。見る者が表面に留まるからこそ、その奥のものとして真理はあり得るのである。

パウボという名は女性器を意味するとされるが、この名によって、真理は性的なものと生とに関連させられている⁴⁾。哲学する事において問題となっているのは生であり、哲学的思索において示されているのは思索する者の生の根本条件であるとされる。詰まり哲学者が求めるパウボという名の真理とは生の真理である。生の真理は女の様なもので、哲学者はその女を求める時に、彼女の全てを暴いて知ろうとする無作法を犯すべきではなく、彼の真理に彼を誘惑させるようであればならない。誘惑という語には不穏な響きがある。其処には、取り返しのつかなさへの危惧、責任を取らせたい相手に責任を取ってもらえなさそうだという不安、騙されているのではないかという疑惑、確かなものの無さが満ち満ちている。しかしその不確実性こそが見る者を引寄せ、喜びを感じさせるものだと言われる。

3 結論

真理を女と呼ぶ表現には、真理を求める際の振舞いの適切さが示唆されている。問いの意味は答えの意味内容に懸かっているのではなく、問おうとさせられる事に、そして答えとして何等か表現し示そうとする試みにある。生の真理を求めるのに、生の性質を記述しようとする様な、生の原理を説明しようとする様な、生自体を言おうとする言葉をどれ程費やしても、これで上手く生きられるという確信を得たという事には必ずしもならない。女に対しては弃えておくべき礼儀があり、適切な振舞いをした時こそ彼女は誘惑し、求める者を搔立てる。真理が準えられるこの様な女の表象は、単に捉え難いものではなく、捉えようとさせ同時に捉えさせないものを意味する。

不確実性の背後に身を隠す自然とは、問う者にとって彼自身とは違う別の存在者である何かではなく、彼自身の生も含んだものである。哲学者と彼の真理とは、追い求める男と誘惑する女の関係にある。この哲学者は認識自体に価値を置くのではない。彼は全てを知り尽くそうとしないが故に引寄せられる。不確実性が女を魅惑的にしている。ギリシア人的な生きる能力としての表面に留まる事とは、ヴェールに引寄せられつつその前に留まる事、疑わしさに留まる事である。疑わしさに引寄せられる者とは充実に飽いた者であるが、ギリシア人が生という女の疑わしさに引寄せられていたという事は生存の不確実性を知らなかったという事ではなく、不確実性に苦しんで確実性を必要とする者が神である真理を信仰するのとは違って、彼等が不確実性を別様に意味付ける術を心得ていたという事を意味している。

本稿では女としての真理像の意味を問う事を目的としていた。パウボという名の下ではヴェールの機能とそれに引寄せられる喜びが理解される。

しかし真理とそれを求める哲学者との関係としては、ツァラトゥストラの語る生と彼の関係については、そしてその関係は智慧によって結ばれるものとされるがこの智慧については、論じる事が出来なかった。また仮象は芸術とも関わるものであるが、真理と芸術との関係について触れる事が出来なかった。これ等の事を今後の課題としたい。

注

- 1) ニーチェの著作からの引用は下記の全集に拠った。引用箇所には書名の略記と節番号、頁数を併記する。
 F. Nietzsche, *Sämtliche Werke*. Kritische Studienausgabe, hrsg. v. G. Colli und M. Montinari (Berlin/New York) 1988. (KSA. と略記する)
 FW: Die fröhliche Wissenschaft, KSA. 3
 JGB: Jenseits von Gut und Böse, KSA. 5
 GM: Zur Genealogie der Moral, KSA. 5
- 2) S. Kofman, “Baubô: Perversion théologique et fétichisme”, *Nietzsche et la scène philosophique* (Galilée) 1986. Strong による英訳 (Michael Allen Gillespie and Tracy B. Strong, *Nietzsche's New Seas: Explorations philosophy, aesthetics, and politics* (The University of Chicago) 1988.) を参照。コフマンはこの論文において、ニーチェの後期の諸著作と遺稿から、見る事と真理の女としての像について論じる。
- 3) 女としての生については次の様に言われる。「生の上には美しい可能性という金糸織りのヴェールが、約束し、抵抗し、恥じらい、嘲弄し、同情するように、誘惑的に掛かっている。そうだ、生とは女なのだ。」(FW 338, KSA 3, S.569) またツァラトゥストラは、彼と生という女と彼の智慧という女 (die Weisheit) との関係語り、彼と生の間には智慧が必要であるとされる。
- 4) 獐猛にして峻烈な生、そしてコフマンはこれに永遠回帰を接続させるのだが、その様な生である女の名はパウボだと言う。そしてパウボのスカートを持上げる事と笑いについて、パウボが露にして見せたのはオイディプスに不幸を齎した様な真理の恐ろしさではなく、「彼女の腹のディオニュソスの絵を見せる事で、彼女は生の永遠回帰を思い出す」(Kofman, p.255) と述べる。パウボは生と結び付けられ、またディオニュソスの女性的分身とも見なされると

される。F. N. Opperl, *Nietzsche on Gender: Beyond Man and Woman* (University of Virginia Press) 2005. Opperl はニーチェ思想とその記述における女性のイメージの担うものを初期からツァラトゥストラの時期を通して追っている。ニーチェはディオニュソスというイメージを従来の哲学における二元論的対立を批判する為に用いたのだと彼女は言う。アポロンとディオニュソスという対は、従来の理性対自然、文明対自然、男性対女性という対立を一見模した様で、しかしその対立を批判するものである。ディオニュソスと女の類縁は、この従来の対立において同じ側に振分けられるという点にある。

(大学院博士後期課程学生)

RESÜMEE

Die Wahrheit als Weib

—Das Wahrheitsbild beim späteren Nietzsche—

Hiroko IKUSHIMA

Nietzsche stellt die Weiber oft dar, z. B. das Leben als Weib oder die Wahrheit als Weib, und sie sind sehr eindrucksvoll. Wie funktioniert das Weibsbild vor allem in der Analogie zur Wahrheit? Nietzsche hält die Wahrheit für das Gefühl der Gewissheit, d.h. die Überzeugung. Im Bild der Wahrheit als Weib stellt er dar, wie man sie suchen sollte.

Er meint, die bisherige Philosophie und die moderne Wissenschaft sind von der Wahrhaftigkeit, d.h. dem Willen zur Wahrheit getrieben. Dabei glaubt man an die Wahrheit, die dem Gott gleich ist.

Im Gegensatz zur Wahrheit als Gott oder in dem Parodieren solcher Wahrheit stellt Nietzsche sie als Weib dar. Unter dem Bild Baubos versteht man die Funktion der Schleier. Sie ist verführend. Aber aus der Scham zieht das Weib die Schleier, deshalb ist es unanständig, ihm sie abzuziehen. Wenn man das Weib namens Wahrheit verstehen will, muss man sich so schicklich verhalten, wie wenn sich ein Mann zu einem Weibe verhält. Man sollte keine Schleier abziehen, keine nackte Wahrheit anschauen wollen. Es handelt sich hier um die Wahrheit des Lebens. Die Liebe zu ihr ist ähnlich der zum Weibe, an dem ein Mann Zweifel bekommt. Sie gehört zu der Freude daran, nicht zu wissen.

Stichwörter : Baubo, Scham, Leben